

につとめ、またその講和に際しては、後藤の介添として大坂城中に出向き、和睦の内使を勤めている。

以後、家康の最後まで、駿府において、側近に奉仕し、家康政権下における彼の存在には隠然たるものがあつた。以上後藤・茶屋はともに商人身分の出身ではあつたが、家康の側近のブレーンとして、経済政策上に貢献し、家康の生存中は側近勢力を代表して特殊な立場を維持していたのである。

(中田 易直)

参考文献

- 『東京市史稿』(産業編) 塚本豊次郎編『日本貨幣史』 『譜牒余録』 『武徳大成記』 『朝野旧聞哀藁』 『本光国師日記』 田谷博吉『近世銀座の研究』 中田易直「茶屋四郎次郎由緒考」(歴史地理) 中田易直「近世初頭の貿易商人たち」(日本人物史大系)

酒井忠世と土井利勝

☆酒井忠世(一五七三生〜一六三六没・六五歳)

家光の時、大老職

☆土井利勝(一五七三生〜一六四四没・七二歳)

家光の時、大老職

複雑な組合せ 秀忠の時代から家光の初期という、江戸幕府確立の大事な時期に、一番の老臣として重きをなしたといわれているのが、酒井忠世と土井利勝の二人である。慶長の初年から老中の一人として信望のあつた本多正信(佐渡守)が元和二年六月になくなったとき、江戸では「上下万民おしみ申候事、不_二大方_一候」と残念がられたが、それに代って信望を集めたのが土井利勝で、「今は、だれもかれも大炊殿(利勝)へ頼入体と相見へ申候。(中略)今からは本上州(本多正純・正信の長子・老中)の口入にて、大炊殿へ弥御入魂、御尤之儀に而候」(本光国師日記)と僧



徳川家光

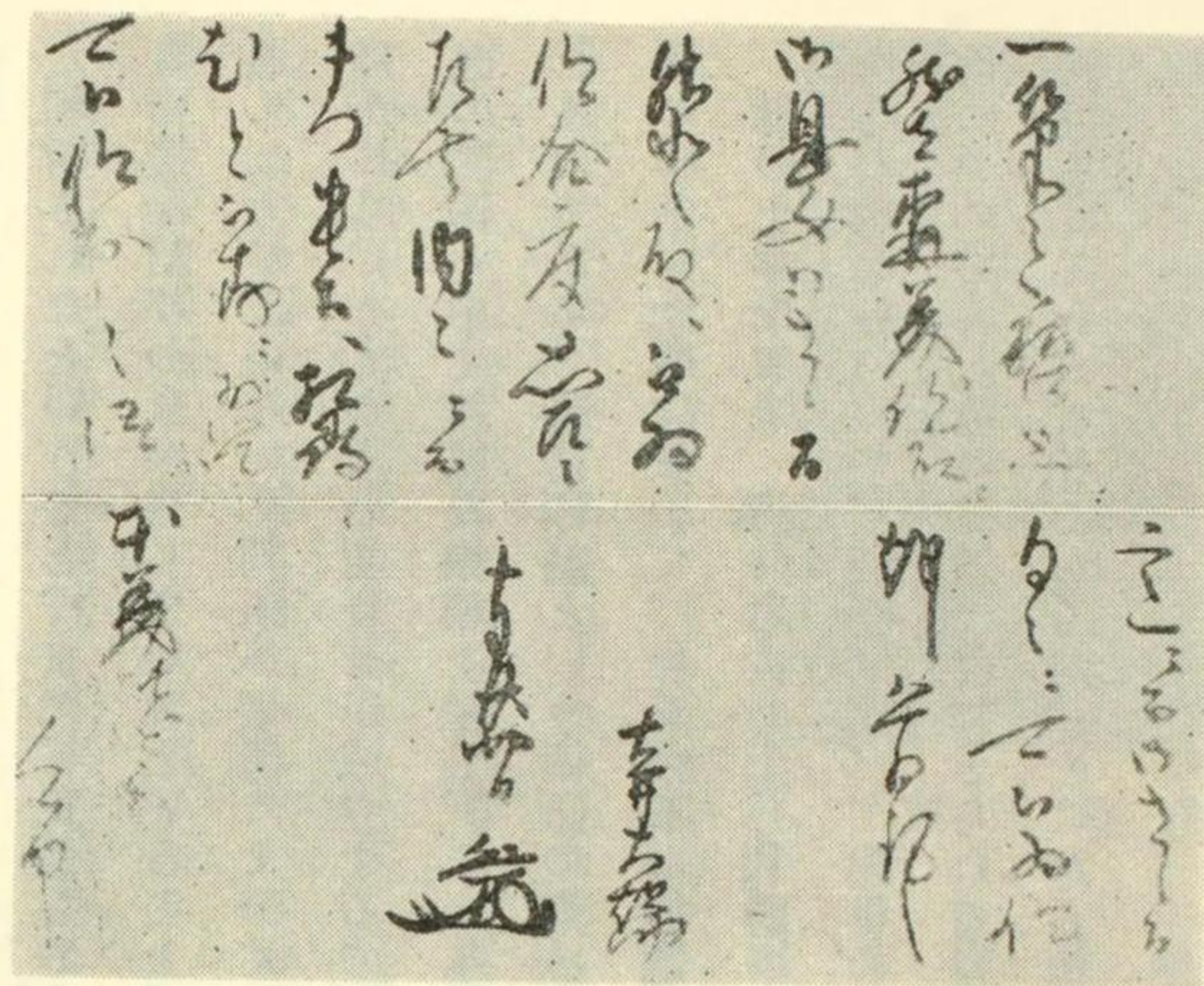
崇伝が細川忠興に報じているほどである。このとき、利勝は四四歳。このころの老中たち、酒井忠利（備後守）は五八歳、酒井忠世（雅楽頭）は四五歳、安藤重信（対馬守）は六〇歳であるから、利勝が一番の年少者ということになる。かつて、本多正信は、駿府に移った大御所家康に正純を附属させ、自らは江戸に残って將軍秀忠を補佐するという体制をとり、幕閣内部における本多家の地位を確保していた。家康のあとを追うようにして正信がなくなると、そのバランスが崩れて、上記のような利勝の抬頭を見るようになるのであるが、正信には、自家の政治勢力を維持するために、青山忠成（播磨守）・内藤正重（修理亮）を狩場侵犯の教唆者として陥れ（慶長一八年）たり、大久保忠隣（相模守）を改易に追いやりたりしたという暗い面の話も伝えられているように、江戸時代初期の譜代諸家における政治勢力の消長、隆替の裏面には、まだまだ窺い知れない数多の秘話がかくされているよう。

細川忠興が、勢力を伸ばして来た利勝と「入魂」になろうとするには、本多正純の「口入」を必要とするというところにも、いくつか考えて見る問題が潜んでいるよう。正信の存生中、忠興は

専ら正信にたよっていたのであろうが、その歿後は、新興勢力である土井利勝と結んだ方がよいと判断されたということ、また、正信との入魂という既成事実が、正信の子である正純との間にも密接な結びつきが生じていたということ、そして、忠興が直接に利勝に近づくよりは、正純を通じた方がよいという判断が崇伝によってなされたということなどが先ず考えられようし、このほかにも、いくつもの組合せが成立するであろうが、それらが、將軍家と老臣と大名という三つ巴の関係の中で複雑な様相を呈し、しかもその複雑さの中から、幕府の持つ大きな力が生み出されるのである。幕藩体制という術語の意味するものを、ここで端的にいうことは出来ないが、上記の事柄を念頭に置いて、いろいろな問題を考えて行きたいと思っている。

謎の土井氏家系 酒井忠世と土井利勝の逸話を探しているうちに、奇妙なことに気がついた。逸話の数からいって、利勝に比べて忠世の方がずっと少ないのである。また『藩翰譜』でも、忠世についての記載は、あっけにとられるほど簡単なのも不思議である。こうしたことも、案外に軽視されているようであるが、そこから何かの結論を出そうというのではないから、今は伏せて置こう。

酒井忠世の家は、いわば徳川家の一族である。家康から七代前の泰親（文明四年（一説に文安三



土井利勝自筆書状

年、永享二年、永享八年ともいう」歿）の兄の広親（明徳三年歿）から七代後が忠世である。

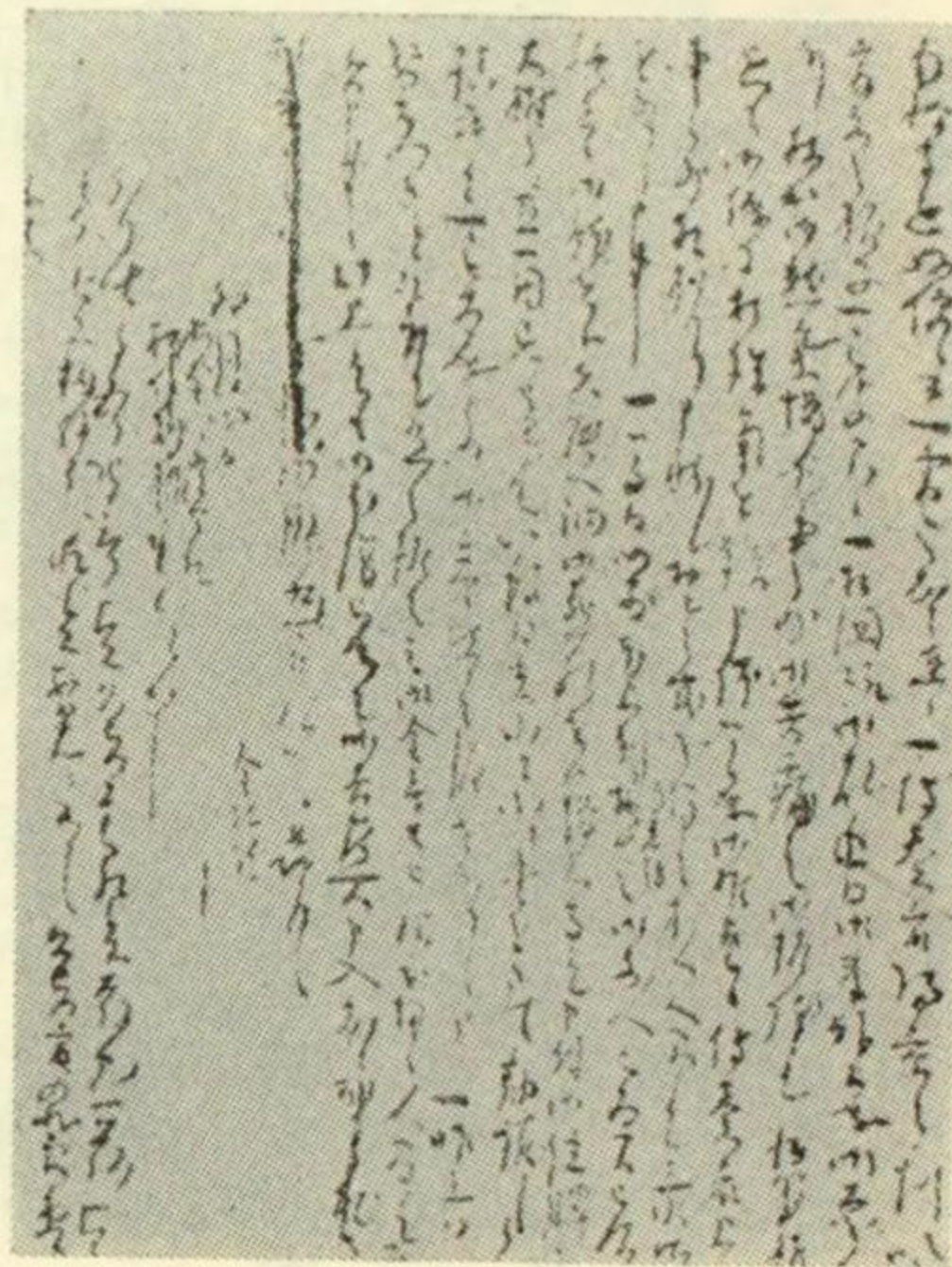
こう見ると、家康と忠世とは徳川一族の同世代ということになるが、実際は家康の方が三〇歳の年上なのである。忠世が秀忠の家老職となったのは天正一八年のこととされている。天正一八年といえば、家康の関東入国の年で、忠世は川越領（父重忠の領分）のうちで五千石を与えられている。

一方、土井利勝の家系は、そう遠くまで遡ることは出来ない。利勝の父の利昌から先ははっきりしていないのである。『藩翰譜』では、「頼光朝臣の後、美濃国の源氏土岐の庶流、土居遠江守貞秀が末孫、小左衛門利昌が

嫡男」が利勝だとしている。『寛永系図』を引用した『寛政重修諸家譜』では、「貞秀より利昌に至るまで、其あひだ世系を失すといふ」として、系図の最初に、辛うじて利昌を置いているのは、『藩翰譜』が、土井家の説明を利勝から始めているのと同じことでしかない。三河の土居村（碧海郡）を本貫としているようで、土井の苗字もそこから来たのであろう。幼少のころから家康に近侍していたというが、出生に家康の御落胤という説があるくらいなので、家系の貴賤などは、あまり問題ではなかったのかも知れない。秀忠が生れる（天正七年）と、秀忠に附属して、二百俵の扶持を与えられ（七歳）、やがて一九歳のとき（天正一十九年）、千石の知行地を与えられるようになった。

酒井忠世は、このときすでに五千石で、秀忠の家老職（二〇歳）であり、土井利勝の上に立っていた。利勝に御落胤の謎があるにしても、忠世の家系の誇には筋金が入っている。出発点ではるかに遅れていた利勝が、元和・寛永という、幕府の基礎を固める大事な時期を迎えたとき、崇伝の観察によれば、忠世をはるかに追い抜いていたように見えるのは、一体そこに何があったのであろうか。今しばらく崇伝の観察したところを見てみよう。

利勝の朝食会 崇伝が土井利勝にとりいつているということは、大分の評判であったようで、



崇伝自筆の日記

「我等儀、大炊殿御懇之由」だということ
を、京都にいる崇伝へ、江戸から申送ってい
る手紙もある（本光国師日記）。そうした崇伝
であるから、利勝のことはべたほめで、

「一、土井大炊殿、^{いよいよ}御出頭に而候。拙
老も節々参会申、別而得御意申候。我等
旅宿（崇伝在府中）へも御出候而、しみしみ
と放（話）申候。事之外おくゆかしき御分

別者に見及申候。両御所様（家康・秀忠）、御見立之仁に候間、不_レ及_レ申事に候。今は出頭一人
之様に相見へ申候。人之申事をも、こまごまと御聞候。寄特に存候事に候。貴様（細川忠興）
も別而可_レ被_二仰通_一と思召之通、尤に奉_レ存候」（本光国師日記）

と、細川忠興に報じている。「おくゆかしき分別者」であり、「人之申事をも、こまごまと御聞
候」ことを「寄特」といつているが、それだけ人をひきつける気質を持っていたのであろう。人
の話をよく聞くということには、次のような逸話が伝えられている。紀州家の附家老の安藤帯刀

は、藩政整備の実績を大いに挙げた人物であるが、その帯刀のもとに、利勝が見習いとして行っ
たことがあるという。それは、利勝はまだ年少であるが、後には政柄をも授けられるべき人物で
あるというので、特に出張を命ぜられたのである。そして、

「安藤が政局に出て、政を為_{なす}を見るに、群有司かはる_く出て、様々の事を議し、其措置を伺
ふ。いつも帯刀聞たるまでにて、更に己の了簡を云ことなし。幾日見ても同じことなりけれ
ば、或時、安藤に、態_{わざ}と政の仕方見習の為に参りしに、何一つこれといふ節も無く候は如何な
ることよと問ければ、安藤云ふ。さればとよ、今に当りて、拙者所存を申すときは、皆それに
成申候。さある時は、我一人計_{ばかり}に成候はん。紀伊殿（頼宣）に人を捨_{こしらえ}進_たじ申度さに、成たけ
人々に存寄を尽させ、取計に骨折らせ候なりと答ければ、土井感じ入り、歸りてその由申上げ
れば、それが稽古の為に往て見習へと云付たる所よとの御誼なりしとなり」（甲子夜話）
ということ、利勝は、自分の判断をすぐに主張せず、人のいうことをじっと聞く修練を積ん
でいたのであろう。

また、利勝の言として、人物を見さだめるむつかしさ、そして人にどう見られたらよいかとい
う「こつ」を述べたものが伝えられている。

「人には馴て不_レ見ば、知難き物なり。譬ば、客あり。是に対面するに、玄関にて逢て能_よき人も、書院に通して見違る有り。また玄関にてさのみ能_よと不_レ思共、書院にて見直す人あり。また玄関、書院共に別条無_レ之して、居間へ通し、語見て感じ入る人あり。然れば、今仮初_{かり}に逢て、善きとも悪しき共評判し難きものなり。先は、人は玄関のよきが肝要なり。子細は、居間へ通す人は、十人に一人、書院へ通す人は十人に三、四人、其外大方は玄関なり。老中杯に逢へば（逢ふはカ）皆玄関なり。去れば書院、居間にて見通さるる人も、肝心の玄関あしければ、初に見劣さるるの損あり。若き輩、爰_{こゝ}を能_よ嗜べき事なり」（翁草）

人物を見定めるのに、どこまで意を用いるかは、その人の得手勝手もあるが、利勝は割合公平に自らをつとめていたようである。その一例として、今日でもよく行われている「朝食会」が、利勝を中心に行われたと思われる材料が残っている。簡単な記事なので、はっきりしたことは分らないが、これからもっとよく調べてみようと思っていることの一つである。それは、やはり崇伝の書いた記事で、

「一、八月十一日（元和二年）、朝食に土井大炊助殿御出。相伴は松右衛門殿、伊丹喜之助殿（康勝）、閑斎、宗恩也。朝食之以後、風呂有。後段有。機嫌能、直二城へ出仕也」（本光国師日記）

というものである。「機嫌能」く出仕して行ったのは、利勝であろう。「後段有」というのは、話のつづきという意味でもあろうか。また、一〇月一日にも、

「土井大炊殿、板倉伊賀殿、伊丹喜之助殿、閑斎、神縫殿、後藤宗恩来臨。朝食振舞風呂に候。伊賀殿、大炊殿雙談共申也」（同上）

とあって、このときは、寺社の法度書についての朝食会が行われたようである。

利勝と崇伝 こうした利勝に、崇伝はまた、いろいろとり入ろうとしている。家康の信任を得て黒衣の宰相とまでいわれていた崇伝も、家康歿後は、何かと思ひ悩むこともあったようで、かつて家康の寵を得ていた人々の中にも、急に不如意をかこつ者が出て来たのを見聞きし、自分も、何かそれまでとは違った立場に置かれつつあることを感じていたのであろう。

「宗哲は配所にて、さんさん病之由に候。相国様（家康）御他界之後は、我等状之取やりもな_く候。此比承_{このひ}候へは、宗哲女中駿府に此中居候ツル。宗哲煩に付而、得_え上意、配所へ被_レ遣候と承及候。後庄右もまたさんく_にに相煩候て、駿府（静岡）に罷在候。宗哲、庄三、榮任同様に相国様被_レ為_レ懸_二御目_一候ツル。三人ながらかやう之躰に而候と申事候。何もかも、今にはじめぬ夢にて候」（本光国師日記）



崇 伝

と、こぼし、さらには、

「今は大御所様の時之ことく隙入候事無_二御座_一、おりおり御城（江戸城）へも出仕申体に候へとも、事之外氣も尽、草臥_{くたび}申候事不_二大方_一候」（同上）

とまでいつている（細川忠興宛）。このとき、崇伝はまだ四八歳であるから、肉体的にどうのというのではなく、新しい庇護者を、どこに求めるか、やはり大きな問題であったのであろう。だから、利勝に宛てた手紙で、

「御前（秀忠の）御次_{ついで}而之刻、弥御取成奉_{いよいよとりなし}頼存_二候_一。屋敷之義、是又奉_二頼存_一候。万々貴殿様一人頼存知在_レ之義に候」（同上）

というのも、また板倉勝重（京都所司代）に宛てた手紙で、

「内膳殿（重昌、勝重の三男）御煩、于今同篇に御座候而、咲止（笑止）に存候。昨朝驢庵之菓参候由候。今晚我等（崇伝）も御見廻可_レ申と存候。将又、周防殿（重宗、勝重の二男）弥御奉公無_二御油断_一、御出頭と相見へ申候」（同上）

といつているのも、ただの挨拶を通りこして、何か追従_{ついで}めいていのように思うのは、筆者ばかりであらうか。そして、このころは、利勝に一番の望を託していたようで、老臣たちへの歳暮の進物も、

餅米五俵・数寄屋足袋五足	土井利勝
餅米三俵・足袋三足	伊丹康勝
足袋五足	酒井忠世
足袋五足	安藤重信
足袋三足	酒井忠利
足袋三足	井上正就
足袋三足	水野忠元

というような具合で、利勝には飛び抜けて多く贈っている。伊丹康勝は、前にも出て来た人物であるが、忠世や利勝とほぼ同年輩で、早くから秀忠に仕え（一二歳、天正一四年）、勘定方を出頭していた切れ者であり、利勝との関係も深かったのであろう。このころ、崇伝は江戸に出て来て、も屋敷を与えられず、借家住いをしている有様なので、前掲の手紙でも、利勝に早く屋敷を世話

してくれるように頼んでいる。ついでに、この歳暮は、京都から送っているものであることを附記しておこう（十一月帰洛）。ここで思い出すのが、大久保彦左衛門が利勝のもとに、屋敷内で作った菜を贈ったとき、利勝が礼をいうと、彦左衛門は、「されば、祖母が申には、とし寄衆へけいはくをせねば、立身せぬと申から、進じ候」と答えたという話（古老茶話）である。どこまで本当か疑わしいが、きわめて江戸時代的な話柄である。

前述のように、崇伝の日記のこのあたりには、利勝に筆が集中していて、利勝一人が幕閣を切り廻していたように見える。一時代下るが、林春斎（驚峯）が幕閣要路の人々の変遷を記した『林氏異見』に、

「君臣の間、睦しく和するは佐渡（本多正信）にしくはなし。権柄上に振す大小事共に一人に決するは、大炊介（利勝）にしくはなし。（中略）土井大炊頭、智謀深き者にて候」

とあるところから、どうも、利勝が他を圧して高くそびえていたように感ぜられるが、寛永一五年から大老職についているので、その実力もさることながら、そのころに江戸に下って来た林春斎などの目には、きわめて偉大な存在と映ったに相違ない。それにしても、酒井忠世のことについて、触れたものが少ないのは不思議である。

これはもつと後世のものになるが、湯浅元禎の『文会雜記』に、

「本多佐渡守正信ナドハ、（中略）少シ学問モアリト見エ。但シ人ノ服セヌ人ナリ」

とあって、前の『林氏異見』の正信評とは全くの正反対をいっている。そして、忠世については、

「正信ト同ク、武功ハ何モナキ人ナレドモ、人ノ服シタル人也」

としている。正信の批判の当否は別として、忠世の逸事を一つ二つ拾ってみよう。

元和の初年のことというのであるが、忠世が、利勝やほかの老臣たちと同道して下城する途中で、御台所で働く下男たちが、切り残した魚・鳥の余りを持ち出そうとするのに行きあったことがある。下男たちが驚きあわて、それらを袖にひそめ、身をかくそうとするのを見た老臣の一人が咎めようとする、忠世は、「いや、渠等が如きは小扶持にて被召仕候へば、斯る御影を蒙らでは立申まじ。いまだ江戸に諸事潤沢ならず。仁化の溢れぬ所も候。切端の魚鳥杯は、必渠等にも取らせ度きものに候」（武野燭談）といって、止めたという。こうした一面、身分はずれの潜上沙汰を強く咎めた話も残っている。呉服所出仕の茶屋長以が、町人の身分で、しかも法体でいながら、結構な拵えの脇差を差しているのを見つけた忠世は、殿中で、それを見せて貰い、わ



酒井忠世

やく鞆を出して貰い、それから、木で作った脇差で、飾りも常の通りにしたものゝを差すようにしたという(同上)。

また一寸した誤解から忠世に意趣を含んだ新参の侍を、家康はどう始末するか思いあぐねたあげく、知行の折紙を渡すときに、約束の石高より少くしてやれば、本人の方から暇を願ひ出るだろうと、千石の約束のところを、八百石の折紙を認めて置いた。しかし、それを家康から聞いた忠世は、「新参として、心強く無礼仕段、却て賞翫に存候。内々承合候処、人柄何角共、随分揃ひたる者にて候」と、しきりにとりなし、二千石の知行がふさわしかろうと主張したという。それでは過分ではないかというので、他の老臣と相談の上、千五百石を与えることに決ったが、感

激したのは、その侍で、忠勤をはげみ、やがて足輕を預けられるようになった(同上)。

どうも、忠世の逸話は利勝のそれに比べると迫力に欠けているようである。やはり人柄のせいであろうか。

江戸城炎上と忠世 酒井忠世は、どうもおとなし向きの人物のようである。家光が上洛中(寛永一一年閏七月)に、失火から江戸城の西丸が全焼してしまうという事件が起った。土井利勝は家光に従って上洛途上にあつた。留守を預っていたのが忠世である。一口に留守番というけれども、留守を預るということは大変に重要な役で、なまなかの人物には委せられないものである。しかし、このときに、忠世は責任の重大さにおそれてか、寛永寺に入つて罪を待つという行動をとってしまった。これを注進で知つた家光は、

「水火の天災は、たとひいかなる時にも、のがるべきにあらねば、忠世留守したりとも、火災あらんに、忠世が罪といふべからず。然るに忠世、閥閥(門閥)の重臣にて留守しながら、火おこるとて、おのが咎られん事をはかり、城を逃出て山入する事、ほとんど大臣の所置にあらず。かつは武士の道に於て臆したりとやいはん」(徳川実紀)

と、以てのほか、機嫌をそこねてしまった。留守を預る責任者が、城を離れてしまったことに対

して、またその善後処置の責任のなさに對して家光は怒ったのである。忠世には忠世の考えがあつての入山であらうが、事態は全く逆に展開してしまつた。そして、家光の機嫌を損じてしまつたことに對し、なおさら恐縮して、いよいよ山を出ようとせず、大僧正の天海をたのみ、尾張家・紀州家を通じて、しきりに謝罪を願つていた。尾張家・紀州家も、井伊直孝・土井利勝・酒井忠勝を通じて、將軍家にとりなしてくれたので、その年の暮近く（二月二日）なつて、ようやく、家光の勘氣が解けたという（徳川実紀）。

ところで、『徳川実紀』には、家光が忠世の行動を怒つたという記事につづけて、次のような註がついている。

「世に伝ふる所、忠世、累世宰臣の随一にて、権勢肩をならぶる者なかりしが、後、大に畏縮して、籠居月日をへたり。やがて御免ありしかども、政府に入る事をとどめられ、金銀府庫の奉行となり、身を終りぬ。是より、土井利勝、酒井忠勝の二人、専ら宰輔の重任にゐて、威権やうやう顕赫たりしとぞ」

この註は、『徳川実紀』編纂のときに附加されたものであらうが、あまり耳なれない話である。「金銀府庫の奉行」というものが、どういうものなのか、いろいろなことが考えられるが

『寛政重修諸家譜』の忠世の経歴には、

「十二月赦免をかうぶり、これより職務を止めらる。十二年（寛永）本城をよび二丸三階ならびに櫓、平川門等の修理をたすけ勤め、五月二十二日旧職に復し、かつ西城の守衛をもつとむべき旨、おほせをかうぶる」

と記されている。「旧職」に復したとあるから、もと通り、老中として幕政に参与したと思つていたが、『徳川実紀』の註のような立場に置かれっぱなしで、名目上だけ老中であつたのであるうか。あるいはまた、一般行政や外交などにはタッチ出来ず、もっぱら勝手方ばかり担当してゐたのであらうか。

そして、もう一つの不思議は、寛永一三年三月一三日に「大老」となり、同月一九日に歿する（六五歳）までの七日間、大老職にあつたとする、従来の幕府重職表の一項があることである。土井利勝は、忠世のあとを受けて、寛永一五年一月七日に老中になつてゐるが、忠世の死からその日まで、およそ二年半の歳月が流れてゐることも考えなければならぬと思ふし、大老になつてから僅か二カ月足らずで、利勝は中風のため立てなくなつてゐることも注目すべきであらう。

ここで便宜上、大老という文字を用いたが、利勝の経歴にも大老という職名は出て来ず、「小事



土井利勝の墓

の職務をゆるさる」となっている。忠世の場合には、「小事」云々の記述も見られず、三月一三日は、病氣見舞の上使が忠世の邸をたずねた日になっている。『柳営補任』では、「元老」という項目の第一に忠世を入れて、老中より元老になったとしているが、これらは、江戸時代の人たちが、忠世をどう考えていたかを知る手がかりの一つともなる。

忠世の妹の一人は本多正純の妻となっているが、これは本多正信・正純父子の権勢と手をつなぐ体制がとられていたと見てよいであろうし、娘の一人は、將軍家の信任の厚い藤堂家に嫁している。また一人息子の忠行は、父のあとを追うようにして、三八歳の若さで歿した（寛永一三年一月一七日）。失意のうちに晩年を送った忠世と、父の威勢をとりもどせないうちに歿した忠行と、この二人分の失地回復を狙ったかのように、下馬將軍の異名を世人から与えられた忠清が、忠行のあとを継ぐ。それまで常勝將軍を誇った土井利勝のあとは、しかし、七万石の大名と

して、奏者番・寺社奉行で止まるのも対蹠的である。酒井忠清が、どのようにして、土井利勝の築いた牙城に迫って行ったか、そして、それら徳川家の宿老の家々が次第に変貌して行く過程のうちから、江戸時代の安定した一面が現われて来るのである。また、忠世に、あまり逸話が残っていないのは、孫の忠清の下馬將軍に世間の関心が集まってしまったのではないだろうかとも考えている。

（進士慶幹）

参考文献

- 『本光国師日記』 『藩翰譜』 『寛政重修諸家譜』 『甲子夜話』 『翁草』 『古老茶話』 『林氏異見』 『文会雜記』 『武野燭談』 『徳川実紀』 『柳営補任』 栗田元次『江戸時代』（上巻）『綜合日本史大系』（一七巻）

松平信綱と阿部忠秋

☆松平信綱（一五九六生～一六六二没・六七歳）

家光の時、老中職

☆阿部忠秋（一六〇二生～一六七五没・七四歳）

家光の時、老中職

松平伊豆守信綱と阿部豊後守忠秋は、三代將軍家光治下の幕閣の主要人物であり、事実上の幕府政治の主宰者であった。しかも、この二人の人物は、全く好対象を示し、信綱が知恵伊豆といわれ、性質機敏で才智に富んでいたのに対し、忠秋は性質篤実にして廉直であった。

幕府政治の基礎は、生れながらの將軍である家光の治下で、おおいに整備されたが、この好対象を示す二人の人物がうまく組み合わされて、幕府政治の確立・運営に妙味を発揮し、江戸三〇〇年の基礎をきずいたといってもよからう。